

世界を結ぶ対話録

14

池田先生がつづる 実業家・松下幸之助氏

松下幸之助氏(右)やかに語り合う池田先生
(2008年1月15日、聖教新聞本社記者)

日本を代表する実業家・松下幸之助氏は、池田先生との交友を重ね、こう語っている。「池田先生にお会いできたことが、自分の人生で最高の出来事であった。最高の喜びであった」。先生が松下氏についてつづったエッセーを抜粋して掲載する。(「新たな世紀を拓く」読売新聞社から)

(2月6日付)

「池田先生、やっぱり、若いときの苦労は、買ってでもせな、あきまへんなあ」

有名になった、その言葉を言われたのは、創価大学に迎えた日であった。昭和五十年(一九七五年)の八月四日である。

大学の一角にある茅葺きの一万葉の家^①に、避くから、若い人たちの歌声が、夕風に響いて、かすかに聞こえてきた。キャンパスでは、全国から高等部の代表が集まって、夏季講習会が行われていた。陽が落ちても、なお昼間の熱が残っていた。

その前、松下さんの到着を、鼓笛隊が演奏で歓迎した。

「ようしゅうおますなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」

「結構ですなあ」



松下幸之助 1894年～1989年。松下電器(現・パナソニック)の創業者、社会活動家、小学校を4年でやめ、火鉢研などで丁稚奉公(でっちぼうこう)した後、関西商工学校夜間部に学んだ。1918年、松下電器器具製作所を創立。卓越した経営手腕で、世界的家電メーカーへと成長させた。46年には「PHIP研究所」を、79年には松下政経塾を創設。社会の平和と繁栄のための思想研究、人材育成にも尽力した。

「国家」より「人間」を

昭和四十六年(一九七一年)の初冬の夜、お話をいただいた。閑静な庭園を自ら案内してくださり、茶室で松下さんのお前前を楽しみながら、懇話した。

この時に「松下政経塾」の構想を初めて決めた。

「日本は政治が選れている。いい政治家をつくらなければいけません。それにいい人を育てなければ……」

松下さんは「経営という本質において、企業も国もいっしょ」と見ておられた。

企業の命運は、経営者の「経営理念」であらゆる乱は、日本の政治が「国家経営の道徳」を欠いているところから生まれていきます。

「一体、どんな国を、どうやって、つくろうとしているのか。」

「国家百年の大計。なきて、その時々の利害で動いている現状では、「国家の経営」が、うまくいくわけがない。企

業だったら、どうにつぶれている。――憂国の情は切なるものがあった。

私を総裁にとの、もったいないお話をいただいたが、その任ではないので、丁寧に断りました。

その後も、会うたびに、熱心に懇話の構想を語られた。意見を求められ、私は、いくつかの教育機関を創設した経験から、率直にお話した。

「二期生というものは、集める側の意欲もあって、比較的いい人が集まります。したがって、「毎年一期生をとる」決心がわりになってはいかがでしょうか。」

一期生を鍛え抜き、その二期生が母校に帰ってき、後進を訓練する。そこからも人材を繰り返してあげて、良き伝統を築いていくわけです。吉田公徳の「松下村塾」も、いわば一期生しかくってありません。

塾の路線について、「国家、より人間」を前面に主張したほうが、よいのではないのでしょうか」とも申し上げた。

松下先生は若き日に「自転車ランプ」を製造した。大正時代、二十代の後半である。そのころは「ロウソクランプ」が普通で、風のためによく消えた。ガスランプは高いし、電池ランプは「三時間しかもたなかった。そこで工夫を重ねて、三、四十時間ももつ調的な電池ランプを発明した。これは、きつと売れるぞ。」

意気込んで問屋を回ったが、期待に反して、相手にされない。だが「電池ランプはダメだ」という先入見にとらわれていたのである。

電器店でもだめ。自転車屋でも断られた。八方ふさがり。しかし、あきらめきれない。大衆が求めるものは、必ず売れるはずだ。

松下青年は、どうしたか。

ともかく「罵名を知ってもらうことだ」と決めて、何と、無料で小売店にランプを置いて回った。

点灯しっぱなししておいてもらって、「説明書の通り、長時間もつは、買ってください。もたなかったら、代金は戻ります。こう言って、大阪中を手分けして駆け回り、「実験証明」してみせたのである。

本来の松下商法は、「当分の間の基本を一步、重ねる」という道を重んじる。それがら見れば、これはいかにも「奇手」だが、この時は、これ以外に道はなかった。

ランプの真価が知られるにつれ、爆発的に売れ始め、松下電器の発展の基盤となるのである。

「知恵は無限だ。人間は王者だ。人生はドラマだ。苦勞を惜しまぬ人間に、不可能はないんだ。」

私は、松下青年が燃え尽きる情熱で、自作のランプを持って、大阪を駆け回っている姿を思い浮かべる。

「これがあれば、夜道も明るくなりませう。」

それから十数年、九十四年の松下先生の生涯は、まさに「元光を灯す」と走り続けた一生であられた。

二十一世紀へ光を、光を、精神の光を。

「要は、人間ですね。池田先生。事業は人です。人間をつくらなく、どうにもなりません。なんをくらなく、どうにもなりません。人間を立つ人間がおらんと、何ができて先面に立つ人間がおらんと、何ができません。」

情味あふれる、先生のあの慈顔が思い出される。

4面に続く



こちらから過去の連載をご覧ください

環境クリエイターって、どんな人？



空気空間クリエイター



カーボンニュートラルクリエイター



クリーンエアクリエイター



まちづくりクリエイター



スペースライフクリエイター

高砂熱学には、あたらしい空気を生み出す、さまざまな人がいます。人々の暮らしをつつみ、つないでいく。その空気も、それをつくる人の姿もみえない。だけど、感じる事ができる。ほら、深呼吸をするたびに、空調で培った技術で、その神組みをこえて。私たちは、人に、社会に、最適な空間を生みだしていきます。

環境革新で、地球の未来をきりひらく。

環境クリエイター®
高砂熱学

世界を結ぶ対話録

3面から続く

交流の足跡

二人の出会いはい、1967年10月、東京で行われた学会の文化祭だった。松下幸之助氏には、阪神甲子園球場で従業員の運動会を開いた経験がある。この日、二人が織りなす演出に驚嘆した。とりわけ心に染みわたるのは、池田先生の氣遣いだった。

大行事のさなか、担当者を通して何度も不都合はありませぬか」と挨拶があった。氏は「本当に人を大事にし、人間尊重に徹しておられる。日本の柱ともなる人だと思った」と追想している。

翌月、氏は来日した歴史家・トインビー博士から尋ねられた。「これからの日本にとって一番大切な人は誰か——氏が挙げた名前は「池田大伴」だった。

「経営の神棟」と仰がれた氏の人生、家業の継承もあり、肉親との死別、病累、事業を興した後も、大恐慌、終戦時の財産喪失・公職追放、不況……と苦難の連続だった。そのたびに立ち上がった。

「もうあかんと思ったことがない」と語る氏は、物心一如の繁栄による平和と幸福を目指したP&P研究所を発足、問題意識は、日本の「国家の理念」へと向かい、正しい人間観の確立を訴えた。その目は、偏見に惑わされず、創価学会の価値を疑っていた。ある社内行事の時、上司が学会員でなく部下に対して、こうさげすんだことがあった。この人、南無妙法蓮華經でござい。それを聞いた松田氏はこう返す。

「この君は信心持ったものやないか。君は何が宗教持ったものやないか。さらに誰の前で、この部下に「信心をしっかりと勉強して、わたしに教えてくれよ」と語った。

71年2月、氏から入を介して連絡があった。「池田先生に、どうしてもお会いしたい。当時、氏

かつてない難局は、かつてない発展の基礎に

は76歳。病院で療養中にもかかわらず、「いつでもどこでも行かせていただく」との気遣い込みだった。4月に対談が実現。氏は、志なき日本社会への憂慮を語った。先生は、人間の心に正しい哲学を打ち立ててこそ、世界の繁栄と平和を望める」との「立正安国」の哲語を語った。氏は深く共感した。根本は人間だ。人を育てなければならぬ」と、二人の意見は一致した。帰路、氏をねぎらう同行者に、氏は満面の笑みで語った。「いや、むしろ元気がなくなった。ほんまに楽しかった。先生からは、日本と世界、人類に対する感愛が感じられるんや」。二人の交流は続き、会談は30回を超えた。請われて、先生が御書講義をしたこともあった。

語らうは書でも続けられた。「死をどう考えるか」「エントロピー増大の法則」「政治の目的は何か」「人種差別をなくするには」「愛国心について」「アジアは共通の基礎にたつて」「等々、人生と社会の本質に迫る鋭い知見の応酬。語り合ったテーマは300を超える。その内容は74年から「週刊朝日」で連載され、翌年、『人生問答』として出版された。先生が第3代会長を辞任した翌年の80年、会談を終え、氏は先生の手を固く握った。先生の手に力を感じたという氏、宿念に戻ると周囲に語った。

「この法難を乗り越えれば学会は十倍にも発展する。かつてない難局は、かつてない発展の基礎になる。こそ全力で先生をお守りし、学会の基礎を固くする時だ」。激動の世紀を駆け抜けた氏は、生前、何度も強調したという。

「21世紀になると、池田先生の教えが中心になって、世界が回るようになる。それまで生きて生きて、何となくの目で見届けたい。そのためにも21世紀まで生きねばならぬ」。



芳名録に記する松田幸之助氏(1908年12月20日、東京、資の歴史会館(当時)で)

「用・参考文獻 松田幸之助 池田大伴 著『人生問答』(池田大伴 著) 第22巻、聖教新聞(2005年11月30日) 09年4月7日刊、20年6月17日刊、22年12月16日刊、23年1月6日刊、ほか

みんなの声をお待ちしています！

セイちゃん オーちゃん

今月20日で創刊75周年を迎えた聖教新聞。ここでは、75周年ナビゲーターのセイちゃん、キョウちゃん、オーちゃんが、どんな進化し、充実していく聖教新聞の「これから」を紹介します！

創刊から75年

もっと進化する聖教新聞

電子版はいろいろ楽しみ方があるね！

キョウちゃん

1. もっと便利に

ますます充実する電子版コンテンツ

- 「青春対話」の朗読音声を配信！
- 「人間革命」の研さんコンテンツ
- 「自然との対話」デジタル写真集

2. もっと面白く

新しい企画紙面が続々！

- 文化は平和への扉
- グローバル新時代
- 誓いの大道を歩む
- SOKAの現場 海外編

3. もっと身近に

読者と共につくる新聞へ

- 聖教公式 LINEアカウントを開設
- 交流イベント 「Sスタ」がスタート
- 創価新報がリニューアル

文化は平和への扉

東京富士美術館や民主音楽協会の創設など、池田先生が「文化・芸術こそ平和の基盤」との信念のもとに展開した文化の戦いの軌跡に迫ります。

グローバル新時代

日本で活躍する外国人のメンバーや、自らの地域で共生社会の創出に挑戦する日本人のメンバーなどを紹介します。

誓いの大道を歩む

小説「新・人間革命」の研さんの一助となる内容を1巻ごとに紹介します。各巻を象徴する地域の代表の手記も掲載予定。

SOKAの現場 海外編

社会学者の開沼博氏が直接取材し、創価学会の社会的価値を考察する企画「SOKAの現場」の海外編。第1弾は韓国編を予定しています。

聖教公式 LINEアカウントを開設

聖教新聞公式のLINEアカウントがまもなくスタート。読者の声をもとにしたコンテンツ制作を始めます。社会課題などについての投稿を募集。読者と一緒には聖教新聞をつくっていきます。

交流イベント 「Sスタ」がスタート

有識者と学会リーダーが語り合う対談や、読者参加型のイベントを開催します！ご参加をお待ちしています。

創価新報がリニューアル

本年5月号から、紙面を現役世代向けにリニューアル。「将来の不安」「働き方」「子育て」などの特集記事や、悩みに立ち向かう現役世代のルボを毎月掲載していきます。

輝く瞳の先にあるもの。

何か大きなものができる。
何か新しいものができる。
何か素敵なものができる。

そんなワクワクを
私たちは、いつも、いつまでも
忘れないようにしたいと思う。

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設

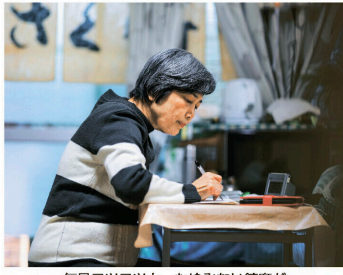
投稿歴は半世紀

【大阪市平野区】自他共に認める“感動屋さん”。畑中政子さん(74)＝女性部副本部長＝は、暮らしで起こったこと、出会った一つ一つを、素通り、しない。悲喜こもごもは全てネタ。オチをつけて面白く。「せやないと、誰も読もうないでしょ」。新聞、ラジオの投稿を始め、はや半世紀。「自分の人生、切り売りしてますねん(笑)」。快活に、時に染み入るような筆致が持ち味だ。(2月16日付)



畑中さん(手前)の明るさは地域に欠かせない。「下向いても、何も進みませんやろ」。力ずくで笑わせに走ることも

書いてなんぼの泣き笑い人生



毎日コツコツと。たゆみない筆跡があつて、よどみない文章が紡がれる

飼っていた金魚が大量の卵を産んだ。「こんなどうするん」と嘆く畑中さんに、次男は「これも大切な命やで」と。なんでも子や。感動をそのまま一般紙に投稿する。こぼすのに図書券まで付いてきた。別の日に図書館で買った。おじさんからの熱い視線を感じ、美人なのも、困りも

暮らしこそネタの宝庫

飼っていた金魚が大量の卵を産んだ。「こんなどうするん」と嘆く畑中さんに、次男は「これも大切な命やで」と。なんでも子や。感動をそのまま一般紙に投稿する。こぼすのに図書券まで付いてきた。別の日に図書館で買った。おじさんからの熱い視線を感じ、美人なのも、困りも

元々、書くことは無縁だった。母は専業主婦で、父は結婚を悪い、生活はじつと楽しみを感ずる余裕はなかった。それが1959年(昭和34年)、創価学会に入会するや、両親は見る見る活力を取り戻す。畑中さんは幼いながらも、信仰の力を感ずった。父の死を機に、親戚のいる宮崎に身を寄せた。定時制高校に通う。働きながら学ぶ高等部員へ宛てた、畑中先生の詩を暗唱した。「苦しみ仕事 深夜の勉強 これも修行ぞ 苦は楽しみ 君が信念 情熱を 仏は じつとみているよ」

夏夜の夜に明かりが浮かぶ教室は、眠気と蚊との戦い。畑中さんが卒業間近に三つづつ一文に担任が涙を浮かべ、卒業生代表に推してくれた。誉々たる賞状。自分なりの言葉が人の心を打つ、初めての経験だった。集団就職で大阪へ。3週間から、毎日のように寝がけしたまな何でもないことまで、母への手紙に書いた。給与日は仕送りするために、郵局へ。清酒を誇りとしながら、その後、憧れの電話交換手。だが社内でのいじめや大失態も味わう。女子部(当時)の活動に励みながら、気が付くは29歳、結婚願望はなかったが、周囲の勧めもあり、14度のお見合いを重ねていった。

池田先生との出会いは81年3月。関西友好総会で役員を務めていた畑中さんに、池田先生から激励が届いた。第3代会長兼任の2年後、直接、お礼を伝えたいと自転車を走らせた関西文化会館で、池田先生とばったり。はやる思いで感謝を口にすると、先生は一分かったよと包み込んでくれた。不安も迷いも吹き飛び、広布の歩みに力をかけた。

結婚して2人の息子に恵まれ、当選した団地に、母を呼び寄せた。地区担当員(当時)となり、12階建ての隅々まで対話に歩き倒す毎日。どの家庭にも泣き笑いがあふれていた。畑中さんは、忘れ去られそう一つ一つをすくすく上げるように、メモに書き留めるようになった。

毎日はラジオ「テレフォン人生相談」に耳をそばたて、情報収集も抜かりない。関西弁をよく楽しむ、モットーは「自分も相手も上機嫌にすること。先日は、団地から施設に入所する友人を、たくさん仲間送り出した。施設職員が「こんなにきやかなん、初めてや」と目を丸くした。手元には、半世紀にわたる投稿を綴ったアルバムが山ほど。「こんな、残してもしよんないねんけ」と笑うが、これこそ名もなき庶民の生活闘争の証し。「高齢化/まだまだ若い/七〇代」。楽しみはこれだからである。

聖教新聞の「声」の欄。ある投稿者を目標にした。大阪の女性。さりげない日常と、仏法の眼を感じる書きぶり。トラブルも、みずみずしい決意に転じる潔さに惚れた。ある時、文章の極意を尋ねた。「とにかく書き続けること。掲載されるかどうかは二次、意に介さなかった。午前4時、ベッドの中でストレッチ体操を済ますと、エッソ全開。息子が使っていた勉強机に向かう。日記に始まり、御書、小説「新・人間革命」と静寂のなかで、わが心を耕していく。「祈っているよ、オチが頭の上に降ってきますねん」

競走馬の厩舎員見習で苦勞する長男。荒れた次男の「一人だけ」の卒業式。夫から初めての花束のプレゼント、焼き鳥の串打ちバイトでの交流……。平穏ではない、山あり谷ありの人生。夫婦で開いたはずの扉。隣家。パチンコまみれの夫との2度目の離婚。息子が起すトラブルの数々。体がやれるような日々も、ちょっと嬉しい喜びを大切にしたい。フライパンなんてあらへん」。なんでも書いた。ただ書けなかったこともある。

93年(平成5年)、母が交通事故に遭った。警察から連絡を受けた時はすでに手遅れだった。全身の血の気が引いた。母ひとり娘ひとり。二人三脚で歩んできた。母に寄り添い、二人三脚で歩んできた。母に寄り添い、二人三脚で歩んできた。母に寄り添い、二人三脚で歩んできた。

悲しみに暮れ、人前を避けた。それでも閉ざした心に光を射す一言があった。「早く出てきてや。殺しやんか」。自分のことを察してくれる同志がいた。悲嘆を抱えたままでいい。人の輪に飛び込んでいこう。人生が一段と味わい深く変わった。

言葉は時に刃になる。だからこそ、読んだ後に人に思いをはせた。「愚痴は道理を消し、感謝の言葉は万代の幸を築く」。『香室抄』の一節を胸に、題目でアイデアをひも出す。「石中の火、木中の花、信じ難けれど、縁に値って出生すればこれを信す」新128・全24巻。御書を綴り、美しい言葉をみつけては刻んだ。

自分も相手も上機嫌に

インベーションも、サステナビリティも支える、TOMOWEL。

- 企業のヘルスケア事業を支援し健康な社会をめざす
- 従業員とのエンゲージメントを高める教育コンテンツの開発
- 紙のラミネートチューブやパッケージを開発してサーキュラーエコノミーに貢献

「こんな未来を支える取り組み」紹介中

